

市立米沢図書館先人顕彰コーナー展

「知られざる？上杉主水家の人々」展示資料翻刻文

※展示中の文書資料のうち一部を翻刻したものです。

※難読文字は□、難読文字が複数続く箇所は（ ）で表して
います。

※文責は市立米沢図書館・宮澤にあります。

為可申上捧愚札候恐惶

謹言

上杉主水

十二月七日

勝庸（花押）

若殿様

御左右

上杉斉定宛 上杉勝庸書状

（上杉博物館蔵上杉家文書一〇七六。国宝）

尊書奉拝見候如

仰寒氣相募候得共益

御機嫌能被成御座

奉恐悦候将又先達而

前髪執相祝且革名

を茂仕候付而御怡被

仰下政之助殿袖留をも

被相祝候御怡を茂被

仰下段々被為入御念候

御儀難有奉存候右御礼

尚以御端書之趣難有

奉存候以上

上杉勝詮・上杉勝庸書状（上杉駿河守宛）

（上杉博物館蔵米沢新田藩主家資料一八二）

春陽之御慶不可有

尽期御座候先以御揃益

御壮栄被成御重齡

年頭之御健儀不相替

段々可被成御整歳久敷

目出度奉寿候此恵

三上様奉始其外両境

御方様御揃倍御機嫌

好被遊御越歳候御事

御同慶奉恭悦候将又

不相替御使者を以為

御祝義御太刀目録被懸

尊意御念入候義辱

祝納仕候右御慶旁

為可申上如斯呉座祖

猶期永春之時候恐惶

謹言

上杉采女

正月朔日

勝詮（花押）

上杉主水

勝庸（花押）

上杉駿河守様

玉机下

再曰倍御揃御安泰被成御加寿

新春之御嘉儀御整目出度奉

賀候呉々両御地御揃御機嫌

克御越歳御規式如御旧例御

伺□奉尋候乍末亭も

御奥江茂御席之節御慶迄

希候私共無別条越年仕候間

御休慮可被下候尚奉期永日

之時候恐惶謹言

（主水への改名を知らせる廻状）

（当館蔵村田家文書五）

今般格別之以

思召 弥五郎様御格直

都而

觀照院様御格合通被

仰出隨而

主水様与被成御革名候

依之御同名之者ハ可被相改候

右之趣被得其意支配下江も

可被相達候以上

十月十五日 毛利上総

三宰配頭衆

前書之通致御達候様

申来候間可被成御承知候
以上

十月十六日 河田豊蔵

新貝左門様

宇加地庄助様

山下茂右衛門様

蓼沼藤馬様

市川勝馬様

村田総兵衛様

相浦利兵衛様

杉駿河守勝道書状(上杉主水宛)

(上杉博物館蔵上杉家文書三九二)

為年頭之御祝

蒙尊書忝拝見仕候

御揃愈御安泰被

成御迎陽候条芽出

度奉存候右尊答一

通為可得御意如此御座候

恐惶謹言

第一月十有六日 大□

上杉駿河守

勝道(花押)

上杉主水様

尊酬

上杉勝義書状 (当館蔵坂口家文書 A 九一六)

貴札辱致拝誦候其表

朝之霜寒感も相募候由

愈御安康被相凌珍重

存候江米

御方々様被相揃倍御機

嫌能被成御座御同慶仕候

随而小生始□家平安消

光仕候間御投意可被下候扱

当秋者御手柄も御不足之由乍去

雁一羽鴻二羽之御獲之由一段

御座候駿河殿ニハ近年無之大

手柄御座候趣追々致承知候最早

時節遅三冬丈夫之候御込合与

想像仕候幸便ニ付何寄之御品

御恵投被下千万辱奉多謝候

長々相楽拝味仕候今便□少之

品候得共置鯛進呈仕候御一盞之

御一種ニも相成候ハ大慶仕候扱

折々御在府中ニ御物語ニも御座候由

誠ニ長々の御楽与想像ニ不堪候

此地も朝之嚴霜寒氣例年方

早御座御其表ハ初雪も降候趣

其後一兩度も降雪寒感も相

□候事与存候今般丹下休息

下ニ付御狩且時氣御見舞

為可申述早々如斯御座候

恐惶謹言

上杉恬養軒〔勝義〕印

十月廿三日

上杉主水様

御報旁

御再伸之御云々辱存候家内江茂

御加書被下辱早速申通御礼答

宜申述候様申聞候是方ハ次第寒

感も相□候得者千万御自愛候様

希候已上

高源院書状 (当館蔵坂口家文書 A 九・五)

御細書被成下有かたくはいし奉候

に被成下候とふかよふノ

よき時節ニ相成候先々

其後おつき益御機嫌よく

被為入候御事恐ながら

御めてたく有難そんし奉候

さやう御座候へハ先日

御意ニ御庭の花咲候ハ

御おてかけニ上り候やうにいたたき

有かたく樂しミおり候処

流行の風にて ワたくし

はしめたおれこれにてハ御約束の

とふり上り候御事もいか、やと

あんしおり候処昨日迄にて

不残全快其内今日御書にて

御こまノに被成下明十日八ツ後

ニても又不都合も候ハ、十四五の

ころニても上り候よふにいたたき

有かたく 申る上ハ

いつニても宜しく候得とも

御意のことく花ハ半開ニとまる

と申ス事とふて上り候ハ、

はんひらきと存てま、

有かたく明八ツ後方上り候御事ニ候

しかし御こころ遣ひハ被成下不申

候よふさんくれくれ願奉候

何も御請のミ早々申上候

めてたくかしく

恐々御細書ニ付しひて

申上候御事乍また年月

ふれした、めにく、御請のミ

何れ明日御目とふりにてしひて

御礼万々申上候御事ニ大□ん歳

宜しく御はんし被成下度

願奉候めてたくかしく

猶々てんきのほともこれ

まてのとりかへしつゝ、き出し候
ま、明日も宜しかる事
かと存し候夕雨中の花も
一しほ成御事ニ候めてたくかしく

(表書)

上 御請

高源

峰松院書状 (当館蔵坂口家文書 A 九・二〇)

暑中御機嫌伺度
申上奉候土用中ながら
殊の外暑さ強御座候へとも
奉存候
御まえ様暑氣の御障も
有られず御機嫌よく
入られ候御事数々御めて度
存上奉り候両御地にて
御旁々様御揃あそハし
御機嫌よく成られ候御事

御同然御めて度有難さ
左様ニ候得も其後は
以の外成御無沙汰致
おそれ入奉候扱ハ麻布
御東様御事御不快扱々
御こまり被遊候御事ニ
入られ候尤段々御ひらき
被遊御めて度御同せんニ
有難存上奉候折々
御ふてきもあらせられ候て
其度えとさいしよの
御様子ニハ成られず
度々上り候ても誠ニ誠ニ
御口御もとり被遊かねても
ほんニほんニ御氣のとく存候
度々の御よふたい書にて
御様子ハ御くわしく御伺被遊
候御事と存上候
駿河守様ニも当年は
御下りなしニ成られ有難
心丈部ニ相成候程無

屋形様御登りニも成られ
御めて度有難悲しも
御紛申上候尚又此間の
御便りニて伺よし
高源院様ニも春中方
御勝病氣ニ入られ候所
先達てハ余程の御不快ニ
いられ候御様子伺誠ニ誠ニ
御あんじ申上候所其後
御便りの御左右伺先々
安しん申上候其後ハ
如何の御様子ニ入られ候や
御くわ敷伺度
屋形様御登りニ成られ
候ハ、嘸かし御心ほそく
思しめし候御事と御さつし
申上御あんじ致候
駿河守様御下りもなしゆへ
御まえ様ニても度々入られ
御しよさいハ無筈と存上
候得共とうそとうそ御やさしく

御せわ進れ戴度ひとへニひとへニ
御願申上候
麻布様ハ私かなるたけハ
御せわも致上候心ながら
存候様ニも参りかね候
はやふ両地の御病人様
御めて度御快よく致度御同然
存上つつけ参進候昨年
よりいやなる事御座候て
しんきに御座候追々取
まぜ申上候相替らす暑中
(御) 左右伺度御めて度申上候
めて度かしく

主水様
御申伺事
峯松院
なをなをせつかく暑さ御いこみ被遊候様
存上候私事もあい替り無かり御続
御心易思しめし戴度候猶又

高源院様も此上候得と茂御不快の御事
御返事の御心遣御無用ニ被遊御快よく
成られ候てから被下候様御伝言よろしく
御上りの時分仰上れ被下候
春中方度々泊りあるき
致候て帰り候てにきうニいろいろ用事
多またじき外へ出候やうにて人の
からたのやうにてこいし御わらひ
草迄申上候めて度かしく

峰松院書状 (当館蔵坂口家 A 九、一五)

御尋とあられ御細書有難
拝見申上候先々仰の通
もはつなから御□弁□
相成候得と茂両御地にて
御旁々様御揃あそはし
御機嫌よく成られ御同然
数々御めて度有難さ
御まえ様ニも寒気の

御障も有られず御機
けんよく入られ候御事御くわ敷
伺御めて度有難存上扱ハ
仰戴候通り去ル二日夜
古来まれなる大地震
にてたいへん其上所々
よりの出火めをあてられ
ぬ江戸中のさわき今ニ
かんかえ候恐敷こ、ちにて
御座候先以
三御屋敷御別条なく
有難御事其の外私共も
別条無之の義仕合ニ御座候
其後も
昌寿院様御柄御かり()
など被遊恐入候御事なから
御旁々様御機嫌よく
入られ候御便迄も替りなし
何寄何寄御めて度御事私
もこなたへ上り候てから
よふよふ安しん致丈部ニ相成

誠ニ誠ニ有難さ

昌寿院様厚御ゑこう戴

夫ハ夫ハ有難御事ニ御座候

当月ニ入私事

屋形様方ひかし御物見江

うつり候様仰戴段々有かたく

候所内方男子老人附候

やう仰戴候所右の

人まづハしきうニ私

部屋手入出息候由ニて

歸り候様申事ニ相成何れ

五日頃ニハ定めし飯田丁へ

歸り候事と存候長々こなた

御世わ戴候御事御席ニ御礼

よろしく御願申上候扱また

地震御見舞として御着

戴有難存上奉候御奥方も

御くわし被下誠ニ御念のし

の御事よろしく仰なりし被遊

被下候

御南様御柄へ御伝言申上

候得ハ猶よろしく申上候様

仰付れ候めて度かしく

主水様

御返事旁

峯松院

御物見ハいそぎ御手入など有られ候御事

誠に恐入奉候御席ニ御内々よろしく御沙汰

御頼申上候以上

猶々せつかくおいこい被遊候様存上候

くれくれも地震の事おそろしき

御事今日□□少もやミ不申

土蔵こわれ候事と死人の数しれす

ま事ニいやな御事仰戴候通り追々の

いやな事計御座候て此上如何なるものかと

あんじられ候地震もなく其御地ハ

先々御静ニて何寄りよろしく

御悅申上候私事もそくさいにて暮したく
御心寄思しめし被下候
めて度かしく

松野八郎兵衛助道書状 (当館蔵坂口家文書 A 九・一)

一筆啓上仕候甚寒之節御座候得共
益御勇勝被成御座珍重御儀奉拝悦候
此表小生始一統無事罷在候乍憚御消念
可被下候將又先便為地震之御見廻
尊書殊見事之御着一折御恵投
被下被為入御念候御儀厚忝奉拝謝候
扱々大變之事ニ而家内一統大周章御遠察
奉仰候筆紙ニ茂難尽儀乍然幸ニ
牛門外ニ而屋敷近所少々ハ震損茂
薄く右故ニ家作之損所茂不足にて
土蔵之分ハ大損し其余委敷ハ別紙
入御覽候乍末此表
御方々様御異条不被為在恐悅奉存候
右之震働ニ而調練茂相休且数々

嚴重之御書附茂被仰出者追々に
御承知茂御座候半乍恐

御二代様御拝領物等御深慮之
御程被思合難有事奉感伏候

此上何れ之儀茂可有之哉猶追々

調練武事相始り候末々之變事ハ

偏御賢察奉仰候右寒中之御見廻

先般之御礼旁如斯御座候猶期

後喜之時候恐惶謹言

松野八郎兵衛

十一月晦日 助道(花押)

上杉主水様

猶以御端書之趣難有奉存候早速一統ニ茂
申聞候処猶よろしく御礼申上候様申聞候
武家町家之模様別紙ニ而御覽可被下候いまたニ
時々震出し昼夜共二者用心致居候追々
寒威強く御座候折角御自愛御座候様
奉祈念候恐々頓首

上杉茂憲書状（当館蔵坂口家文書 A 九、一一）

一書致啓達候秋冷
之節御座候得共愈御安
康可被成起居者此上の
事ニ存候各地
御方々様益御機嫌能
被遊御座候義御同然存候
然者
貴公ニも流行之麻疹ニ
御感被成候処御軽症
にて追々御明快之由安
心罷在候尚尔後御様体
承度候将又小子急参
府ニ者候得共道中万
端無滞着府仕尔後
時季之祟りも無之相凌
候間乍憚御省念可被下候
其表者如何ニ候哉当御地
者出府以来残炎難堪
相覚候所去月廿五六頃方

日々陰々たる天氣合にて
俄ニ冷氣相催し七十度
位ニ相成候右之不時候故力
当年もこれら大流行死
人等夥敷嘶ニ御座候然し
当屋敷ニ者多分相泥ミ
候者ハ無之候得共風前
之灯気味悪存候米藩も
今に相成麻疹にて衆人
相泥み候由何共当惑之
事に御座候右艸々
此節之御見舞迄
如斯御座候恐々頓首

式部大輔

茂憲（花押）

閏月初二

主水様

玉机下

二伸時下折角御

加養專一存候不一

木滑政愿・三瀨清蔵宛 小田切勇之進書状

(上杉博物館蔵上杉文書一三四五・一四四)

一筆申上候昨日申上候通

上山藩中村祐右衛門自分より

山形江周旋相越候処山形ニ而一藩

無残心服にて既ニ今日家老水野

三郎右衛門用人石原某町奉行

嶺岸勘解由三人中村祐右衛門

同道にて御城下江参り

主水様御入奉願度参候途中

中山にて出会佐藤源五右衛門

一同出会一応々接仕候事ニ御座候

兼而御合御座候通千惣督

并大瀧六老之御見込にてハ

不止得候節者此位の辺迄押付ケ

誓約相立させ候様ニとの御底意

御座候処此方より一向ニ不申出

先ニ先方にて兼而渴望候

事之由ニ御座候間可然御大評

被成下度奉願上候尤此通りニ

御座候得者村山一郡ハ動き

申間敷奉存候尤以中村祐右衛門

初め見込ニも可有之候間御聞取

被成下度奉存候右ニ付而者私

一旦歸り可申心得居候処今日ニも

上山ニ着否仕事も有之候間而藩使者

計り御城下江遣し私ハ佐藤江

同道致候様佐藤被申候ニ付任

其意申候万一私歸り不申候而者

御不凶合之儀被為在候ハ御申

付被成下候様ニ奉願候其節至

急立歸り可申奉存候右申上度

早々如此御座候謹蔵

八月十四日 小田切勇之進

木滑要人様

三瀨清蔵様

猶々途中草筆御高免

被成下度此段奉謝候以上